デジモンアドベンチャー　転生者になった…

花音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デジモンアドベンチャー　転生者になった…

【Ｎコード】
Ｎ１８６６Ｘ

【作者名】
花音

【あらすじ】
ごく普通の中学２年生だった。しかし、神様の所為で死んだ【桜木　紫苑】。彼女は”デジモンアドベンチャー”の世界に転生し、自分の運命に突き進む！

第1話　【ｐａｒｔ1☆】（前書き）

初めまして！花音です☆

小説経験は浅いですが宜しくお願いします！

第1話　【ｐａｒｔ１☆】

皆さん初めまして、私は桜木（さくらぎ）　紫苑（しおん）です。

さっきまで１４歳なのに享年１４歳になったの。

『享年』という言葉でわかるように私は死んだらしいの。

何故死んだのか？それは私にも良くわからないけど、まぁ簡単に言えば『事故死』だったかしらね。

どんな事故死かって言うと『バイクに跳ねられてそのまま死んだ。』っていう無念の死。

真っ白な世界で目を覚ますと全身白のお爺さんが私に謝っていたわからない状況。

話しかけてみますか・・・。

「すまん。」

「どうしたの？」

「いや、その、え～と・・・その。」

「はっきり言いなさい。」

「あ、あぁ。実はじゃのう・・その、えと、その・・。」

「はっきり言えと言ってるでしょう！！！！」

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？すまん！！」

（説教中・・。暫くお待ちを…。）

「それで如何していきなり【すまん】なのかしら？」

私はあまり事情を話さないお爺さんに説教した後、もう一度問い詰めてみた。

そしたらお爺さんはやっと私に向き直った。

「り、それはのぅ・・。その・・・」

「早く言いなさい！」

「はひっ！？」

お爺さんはかなり不安そうな顔になって…。

「実はのうぅ・・。お主を殺してしまったのはわしなんじゃ。」

殺してしまった？殺したのではなくて？

「殺したんじゃなくて、殺してしまったの？」

「そうなんじゃ！」

私の何気ない言葉でお爺さんはちょっと安心した顔をした。

でもなぜだろう？お爺さんに聞いてみよう。

「何で殺してしまったのよ？」

「殺してしまった理由はのぅ。」

するとお爺さんは突然立ち上がり、自慢げな顔をしていってきた。

「わしは、神様なんじゃ！えっへん！」

あっそ神様ね。で？

「お主。さらっと流すな！そこは――」

お爺さんがうるさく喋りそうなので私は言葉を遮って神様（？）に

言った。

「それで？理由は？」

神様（？）は口を尖らせてまた座る。なんかその行動の一つ一つがむかつくわね。

「それでな、わしには人間の寿命書類というものがあってお主はあと３０年確実に生きる予定だったんじゃ。」

じゃあ何で死んでるのよ？３０年も確・実・に・生きる予定だったのに。

「それで、お主の書類を落としたときに踏んでしまって破いてしまったんじゃ。」

私は呆れて神様に背を向けた。

すると神様は不思議そうに私に話しかけてきた。長い話は嫌いなんだからはやく切り上げたいのだけれど…

「お主、何処に行くのじゃ？」

「どっか。」

私はそう話して行こうとしたが神様が私を止める。しつこいわね。

「お主がクールで冷静なのは知っておったがそこまでとはの。」

私はしばらく間を空け、神様に言った。

「それが私の運命（さだめ）だったのなら仕方がないことでしょ？」

私はそう答えて行こうとしたがまたまた神様が止めてきた。本当にしつこいわね！

「わしにも、責任があるからのぅ。お主を別の世界に転生させておくれ！」

突然神様がすごいことを言ってきた。転生？

「転生って能力をくれて別の世界に行くことかしら？」

「そういうことになるのぅ。」

新たな運命ってことかしらね。

「じゃあ喜んで生かせて貰うわ。それで？どこの世界に転生させるの？」

私は神様に聞くと神様は少し考え頭に電球が見えた。

「“デジモンアドベンチャー”の世界でどうじゃ？お主にはぴったりじゃろ？」

合ってるかわからないけど、原作も知ってるから悪くないわね。

私は頷いて神様の方見るとかなり安心の顔を見せていた。

「よし、じゃあパートナーデジモンを選びなさい！」

パートナーデジモンと言ったら・・・。

「じゃ、ルナモンで。」

パートナーデジモンはルナモンよね。2体居ればコロナモンも入れていたけど・・・。

「よし、じゃあ出すぞ！」

神様はそう言って両手をあげる。すると目の前にはルナモンが出てきた。

ルナモンは真っ先に自己紹介をしてきた。私もしなきゃいけないわね。

「私はルナモン！宜しくね！」

「私は桜木　紫苑。よろしく。」

「挨拶は済んだようじゃな。それでは送るぞ？」

「頼むわよ。」

「第二人生（セカンドライフ）を楽しんでらっしゃ～い！！」

神様がそう言うといきなり神様が見えなくなった。これは瞬間移動というのかしらね・・・。

第1話　【ｐａｒｔ１☆】（後書き）

更新は遅れるかもしれないですが宜しくお願いします！

第2話　『ｐａｒｔ2☆』（前書き）

今回は転生後の説明くらいなので短いです！！

第2話　『ｐａｒｔ2☆』

私が転生してから8年が経った。

どうして飛ばしたか？それはね・・・

・・・

・・・・

・・・・・

は、恥ずかしくて言えないわね／／／また今度言ってあげるわ。

そんな話は置いておいて私が話しておくべきことを話すわよ。

1．私には親が居ない設定になっているらしいの。

2．太一さんと同じマンション。私が暮らしている部屋の2つ奥が八神家。

3．私はヒカリちゃんと同い年で良く遊びにいく仲。（だと思う。）

4．私のデジヴァイスに特別な機能が付いているらしいの。

教えておくべきことはこのくらいかしら？

次は説明ね。実は最初に目覚めたらポストに手紙が入っていたので宛先を見ると神様からだったわ。

手紙の内容は・・・

『第二人生（セカンドライフ）は今日からスタートじゃのぅ。まぁ楽しむと良い！それであの時に渡し忘れていた【紋章とタグ・デジヴァイス】を同封しておいた。紋章は【運命】。お主に合っているじゃろう？それでデジヴァイスの方なんじゃが機能を1つ追加しておいた。たまに手紙を送るから楽しみにしているのじゃぞ！』

運命のマークは・・・『？』

デジヴァイスの機能は最初はわからなかったが使っていくうちにルナモンをデジヴァイスに収納することが出来るという機能だったわ。結構便利よ、これ。

それと、たまには手紙を送るって・・まぁいいわ。それも1つの楽しみにしておきましょう。

それと、ルナモンは成熟期にまで進化することが出来たわ。今はまだ大丈夫だけどこれからよね。

話を変えるけど私は1週間に4日は八神家にお邪魔させてもらってるわ。八神家に行ったら行ったでヒカリちゃんと遊ぶことが多いんですけどね。

するとこの間ヒカリちゃんが「しおんちゃん、わたしのおねぇさんにならない？」って言ってきた時はとにかく驚いたわね。

私はヒカリちゃんよりも身長が少し高いのでお姉さん的存在に見えるんでしょうね。

さて、説明はこのくらいかしら？

私はこれから八神家に行くのでさよなら。

第2話　『part2☆』（後書き）

次回は日常に入っちゃいますよ！！

お楽しみにっ！

第3話　『ｐａｒｔ3☆』（前書き）

日常編です！まぁ、また短いですが宜しくですｍ（＿＿）ｍ

第3話　『ｐａｒｔ3☆』

ｓｉｄｅ紫苑

「しおんちゃん、きょうはいっしょにねよう？」

「どうして？」

私は今、八神家にお邪魔している。理由は前に教えたから良いでしょう？

ヒカリちゃんと一緒に居て、ヒカリちゃんが変わったことと言えば・・そうねぇ・・。

結構正直者になったことかしら？

ヒカリちゃんが成長してくれて私も嬉しいわ。

話を戻すわよ？私がヒカリちゃんと遊んでいたら急にヒカリちゃんが一緒に寝よう？と言ってきたわ。

「しおんちゃんがおねえちゃんみたいだから。」

お姉ちゃんみたい・・か。嬉しいわね、ヒカリちゃんにそんな事を言われると。

「ヒカリちゃん？私もヒカリちゃんと同い年なのよ。お姉ちゃんは

言い過ぎじゃないかしら？」

私はヒカリちゃんに本当のことを言ってみたわ。実際嘘でもないからね。

「だって、かおだちもおとなっぽいし、しゃべりかたもおとなみたいだから。」

私ってそんなに老けてるのかしら？まぁいいわ。それでも嬉しいし。

「そうね、じゃあヒカリちゃんが満足するまでヒカリちゃんのお姉さんになってあげるわ。」

私がそう言うとヒカリちゃんは喜んでくれた。

ヒカリちゃんが喜べばそれで良いわね。私の方も満足するだろうし。

「ありがとう！しおんおねえちゃん！」

とうとうお姉ちゃんまでつけちゃったわね。

「しおんおねえちゃん、いっしょにべんきょうしよう？」

ヒカリちゃんがいきなりそんなことを言ってくるので私は漢字を教えることにしたわ。

ｓｉｄｅヒカリ

しおんおねえちゃんにかんじをおしえてもらうことになったの。
「じゃあまず、名前からね。私の名前は『桜木　紫苑』って書くの。」
わたしはかんじノートにしおんおねえちゃんのかんじをかいてみた。
すると、しおんおねえちゃんはちょっとわらい、ちゅういをしてくれたの！
「『桜木』は出来てるけど『紫苑』は『紫草』じゃないわよ。」（笑
「あ、まちがえちゃった。」
わたしはまちがえたからもういちどかきなおしてみた。するとこんどは、
「うん。OKよ！ちゃんと書けたわね、『桜木　紫苑』。上手よ！」
紫苑おねえちゃんはえがおでいってくれたのでわたしもいっぱいわらった！

side紫苑

今日1日、ずっと漢字の勉強をしたからかなりの数の漢字を覚えたでしょうね、ヒカリちゃん。

夕方になると太一さんが帰ってきて、話をしてきた。

「そういや紫苑は明日のキャンプ行くのか？」

太一さんは私にキャンプに参加するかしないかを聞いてきたため私は答える。

「ヒカリちゃんは参加できないのでしょう？」

すると太一さんは悲しい顔で答えた。

「あぁ。夏風邪はしつこいからな。」

「じゃあ私もヒカリちゃんと一緒に残っていますよ！」

本当は一緒にデジタルワールドに行って光子郎さんたちと冒険をしたかったけど、しょうがないわね。

「本当か！？」

「えぇ。もちろんよ。楽しんできてください！」

私は太一さんに笑顔向ける。本当はこれから起こることも話したい。けどやめておきましょう。

「あ、ありがとうな！紫苑！」

太一さんはそう言うとリビングに戻っていった。

するとヒカリちゃんが部屋に入ってきて悲しげな顔しながら言う。

「私のためにキャンプにいけなくてゴメンね。」

他人第一は心に傷なのよ。しっかりね、ヒカリちゃん。

「良いのよ。妹的存在の子を1人残しておけないでしょう？」

私の言葉でヒカリちゃんは私に笑顔を向けてくる。頼もしい子ね。

ｓｉｄｅ第三者

そのあと紫苑は八神家でご飯を食べ、ヒカリと一緒に寝ることになった。

第3話　『ｐａｒｔ3☆』（後書き）

次回はとうとう原作入り！！

ですが、主人公紫苑は行きません。

第４話　『ｐａｒｔ４☆』（前書き）

とうとう原作入り！

主人公はどんな行動をしていくのか！？

第４話　『ｐａｒｔ４☆』

ｓｉｄｅ紫苑

今日は８月１日。８月１日といえば・・・

太一さんたちは今日のサマーキャンプの真っ最中にデジタルワールドへいくのね。

「__ちゃん！」

どういった行動をとるべきか考えないと・・。

「__お姉ちゃん！」

太一さんが帰って来るのは１１時２５分くらい。

「紫苑お姉ちゃん！」

は！？ずっと考えていたからヒカリちゃんが呼んでたのに気づかなかったわ。

「ゴメンねヒカリちゃん。何？」

「テレビに、デジモンがうつってるよ。」

私は原作を知っているためテレビにデジモンが映ることも知っていたわ。

「ヒカリちゃん。やっぱりデジモン知ってるのね。」
（ボソッ）
「ん？」
私が呟くとヒカリちゃんが振り向いてきたので、笑って誤魔化してしまったわ。
「ヒカリちゃん、私も見えるのよ。」
「本当？」
「えぇ。今此処で見えるのはきっとヒカリちゃんと私だけかもね。」
私は実際にルナモンがパートナーなのでテレビに映るデジモン達が見えているだけだと思うわ。
するとヒカリちゃんは涙目になりながらソファーに座って・・
「誰も信じてくれないの。ずっと前にもデジモン見たのに誰も信じてくれなかったの。」
ヒカリちゃんの言うずっと前とはきっと4年前の事件のことね。
「皆に信じてもらえなくて・・。」
信じてもらえなかった事が相当悲しいのね。
私はソファーのヒカリちゃんの隣に座り、ゆっくり抱きしめてあげ

た。

「私は信じるわよ。誰も信じなくても私だけは信じるわ。」

「本当に？」

「私を・・・お姉ちゃんを信じてみて。」

「うん。」

ヒカリちゃんは少し元気になり、もう一度ニュースを見る。良かったわ。元気が出て。

私はニュースを聞きながらソファーの下を見ると、原作通りヒカリちゃんのデジヴァイスが置いてあった。

猫のミーコに取られると厄介なことになるしね。

私はヒカリちゃんに許可を貰って部屋を貸してもらい、これからの行動を考えているわ。

（ピンポーン）

すると突然インターホンが鳴ったわ。時計を見ると１１時２５分くらいね。

このインターホンは確実に…と思いながら玄関へ向かったわ。

「は～い。」

私は玄関のドアを開けるとそこにはやっぱりコロモンを持った太一さんが居たわ。

「た、太一さん！？キャンプはどうしたんですか？」

すると太一さんはかなり動揺して言ってきた。

「ヒカリが心配でさ。途中で帰ってきたんだよ。アハハハハ。」

私は内心呆れながら入れてあげた。

「まぁ取り合えず入ってください。太一さん、【コロモン】。」

そして・・・・・

「紫苑。どうしてコロモンのことを知ってるんだよ。」

あぁ。何て言おうかしら。・・・・・・あ！？

「だって、コロモンはコロモンなんでしょ？」

私は原作でヒカリちゃんが使っていた台詞を使ってみた。

「太一、この子はヒカリちゃんじゃないの？」

コロモンに興味もたれてないわね。

あまり喋らない方がいいわよ。

「紫苑お姉ちゃん。おなかすいちゃった。」

第４話　『ｐａｒｔ４☆』（後書き）

中途半端ですが、ここまでです！

次回はキャラ設定！

第5話　『part5☆』

名前　：　桜木（さくらぎ）　紫苑（しおん）

性別　：　女

容姿　：　まどか☆マギカ⇒『巴マミ』の姿。

性格　：　お姉さん的存在。心優しい。冷静。

嫌い　：　辛いもの。

好き　：　妹的存在の子。料理。

身長　：　ヒカリより5～10Cm高い。

体重　：　???

＜備考＞

この小説の主人公。

金髪のツインテールで縦ロール。（一般に「ドリル」もしくは「ドリルヘア」とも呼ばれる髪型）

神の所為で一度死に、デジモンアドベンチャーの世界に転生する。

ヒカリとは姉妹のような存在。

皆より、一応年下だが、一番面倒見の良いお姉さん的存在。

転生者になる前から頭は良い。

運動神経も抜群でいろんなスポーツの助っ人としても活躍。

よくわからないが神様とは親しい関係。（多分）

第5話　『ｐａｒｔ5☆』（後書き）

次回はｐａｒｔ４☆の続きです！

お楽しみにっ！

第６話　『ｐａｒｔ６☆』（前書き）

オーガモン戦のｐａｒｔ６です！

スタート！！

第6話　『part6☆』

side紫苑

「紫苑お姉ちゃん。おなかすいちゃった。」

太一さんと話をしているとヒカリちゃんが部屋のドアを開けて言ってきた。

そろそろお昼ごはん作ってあげないといけないわね。

「太一、あの子がヒカリちゃん？」

はぁ・・。また喋ったわよ。

まぁデジモンだからしょうがないわね。

「あ、馬鹿！喋るなよ！」

太一さん、かなり動揺してるわね。

「ヒカリ、こいつはな――」

「コロモンも来たんだ。」

ヒカリちゃんは壁に体を預けながら言った。

原作通り、ヒカリちゃんはコロモンのことを知っているのね。
太一さんのほうを見るとかなり驚いた表情をしていたわ。
「どうして、ヒカリまで・・・。」
「だってコロモンはコロモンでしょ？」
ヒカリちゃんは先ほど私が言った言葉を太一さんに言った。
太一さんはそこから黙り込んでいた。
「それより、紫苑お姉ちゃん。おひるごはん。」
あ、忘れてたわ。作ってあげないとね。
「ゴメンね。今作るから。」
私がキッチンに行って材料を出していると太一さんが来た。
「昼飯は俺が作るよ。紫苑はヒカリと遊んでてくれ。」
原作でも太一さんが昼飯を作っていたわね。
まぁいいか。私はヒカリちゃんを連れてソファーに行った。
ついでにコロモンも連れて。
「お昼ご飯はなにかな？」

「さぁ。まぁお楽しみでいいじゃない？」

「そうだね！」

本当はお昼ご飯は何か知っているけど、怪しまれたくないからね。

私の返事でコロモンは納得してくれたわ。

「紫苑お姉ちゃん。」

「何？」

私はヒカリちゃんに呼ばれので返事をした。

「お兄ちゃんってほんとうはキャンプに行ってなかったんでしょ？」

「・・・私にはわからないわ。」

本当はね、教えたいのよ本当の事を。

でもまだ話せないわ。ゴメンね。

丁度会話が途切れたときに、太一さんがオムライスを完成させたからヒカリちゃんとコロモンを連れてテーブルに向かったわ。

原作通り、昼食はオムライスだったわ。

私たちは椅子に座り太一さんがキッチンの片づけをしているので太一さんが来るまで待っているわ。

ｓｉｄｅ太一

どうしてヒカリと紫苑はデジモンを知っているんだ？

デジモンに会ったことがないはずじゃ・・・。

そうやって色々と考えながら作っているとあっという間にオムライスが出来た。

考えは後にしよう。

取り合えずオムライスができた事を紫苑とヒカリに伝える。

ｓｉｄｅ紫苑

太一さんも椅子に座り・・

「「いただきまーす！！」」

「「いただきます。」」

原作同様太一さんもコロモンもがつがつ食べるのね。

そう思いながらオムライスを一口、口に運んでみる。

「あ、おいしいわね。」

「うん。お兄ちゃん、りょうりできたの？」

私が呟くとヒカリちゃんも太一さんに対して質問よ。

「あぁ。あっちの世界でヤマトに教わってたからな。」

太一さんはそう言いながらオムライスを食べるが【あっち】って言いのかしら？

ヒカリちゃんが気づいてなくて良かったわね。

「コロモン。」

「何？」

「私のオムライスあげる。」

原作と同じでコロモンにあげるのね。

「あげて良いの？ご飯食べないと体に毒よ？」

「うん。コロモンが美味しそうに食べてたから。」

ヒカリちゃんは本当に他人第一ね。コロモン、ヒカリちゃんに感謝するのよ？

それとヒカリちゃんが食べないで私だけ暢気に食べてられないわよね。

「コロモン、私のもあげるわ。」

「本当！？ありがとう！！」

３人前をがつがつと食べてる。原作とかわってないのね。

すると太一さんはオムライスを食べ終え電話をしていた。きっと皆がいるか確認しているのね。

・・・そういえば、次は確か・・・。

（ブツン！）

つけていたテレビの電源がＯＦＦになり、突然パソコンがついた。

パソコンに人物って、光子郎さんだったわよね。

「お兄ちゃん！」

「え！？」

太一さんはパソコンに移っている光子郎さんの見て驚いているわ。

「光子郎！光子郎！」

確かこの時ってベーダモンにに心を奪われてテントモンがアトラーカブテリモンに進化するときよね。

「太一さん。」

「太一？」

私とコロモンは一応話しかけてみた。

「なぁ紫苑、コロモン。俺だけ此処でこうしてて良いのかな。」

「それは・・。」

「太一・・・。」

「お兄ちゃん。・・・スイカ、食べる？」

ヒカリちゃんが話を変えようと頑張ってるのね。

「ヒカリちゃん。スイカ切るから運ぶの手伝ってくれるかしら？」

「うん。」

ｓｉｄｅヒカリ

コロモン、元気よくスイカ食べてるね。

「コロモン。」

「なぁに？」

コロモンはスイカを食べながらへんじをしてきたの。コロモンらし

いよね。

「スイカ、ぜんぶ食べて良いよ。」

「本当！？ありがとう！！」

私がそう言うとコロモンが喜んでくれた。

「コロモン。」

「なぁに？」

「お兄ちゃん。もう戻らなくていいよね？」

「えぇ！？」

私がそう言うとコロモンはとってもおどろいていたの。

「コロモンもずっとここにいて良いよ。」

「…ぅ。」

「2人とも、ずっとここにいて。」

「・・・・・。」

side紫苑

私は8等分したうちの3等分を太一さんの所へ持って行ってあげたわ。

そこには原作通りベッドの上に寝転んでいた太一さんがいた。

「太一さん・・・・。」

「なぁ紫苑。」

「なんですか？」

太一さんは元気のない声で私を呼んできた。

「1人で帰ってきた俺って、ずるいのか？」

「・・・・。」

私は暫く太一さんの言葉を聞いてみることにしたわ。

「戦いに行きたくなくて。でも行かないと！と言う俺もいるけど、何よりも行きたくないって言う思いが強いんだ。」

精神が不安定になっているわね。原作以上にやばいわよ。

本当は助言する気はなかったけど、ヴァンデモンの思い通りにされたくないものね。

1つ助言しますか。

「太一さん。よく聞いてくださいね。一回しか言いませんよ。」

「あ、あぁ。」

私がそう言うと太一さんは体を起こし私の目を真剣に聞こうとしているわね。

「私は貴方の思考に任せるわ。でも、これまで一緒に冒険した仲間たちを捨てて貴方は1人楽をしていられるの？此処に残りたいのなら残ればいいわ。それで貴方の気が済むのならね。」

助言して太一さんが行かないなら私が行くしかないわね。でも行くのはあくまでも最終手段として。

私というイレギュラーが存在した瞬間(とき)から原作通りに行くとは限らないわ。

「俺が此処に残ったとしても俺の気はすまない。助けに行っても俺の気が済むかわからないんだ！……紫苑。俺は・・・どうしたら。」

そこまで迷ってるならもう心配しなくて良いわね。

「私は他人の運命を変えることは出来ないのよ？それは太一さんの運命です。自分で決めるのよ。」

私はそう言って部屋を出て、ソファーに座っているヒカリちゃんの隣に言った。

ヒカリちゃんは寂しそうだったので私は話しかけてみることにしたわ。

「ヒカリちゃん。寂しい気持ちはわかるけど、誰かを待つのって良い気分にもなるのよ。」

「紫苑お姉ちゃんは、いままでにあるの？」

「勿論あるわよ。その人を待つのって、待てば待つほど頑張れるものなのよ。」

「うん。」

すると突然電話が掛かってきた。

私は受話器をとる。

「もしもし。」

『紫苑ちゃん？』

ヒカリちゃんのお母さんね。

「はい。」

『ヒカリはどう？』

「元気ですよ。安心してください。」

私はヒカリちゃんを呼んで受話器を渡したわ。

そしてヒカリちゃんは、私から受話器を受け取り太一さんの母さん

と話しだした。

そしたら突然、太一さんが部屋から出て来て原作通りヒカリちゃんから受話器を奪ったわ。

「母さん・・。」

太一さんはそう呟いて受話器を置いた。

私はテレビの電源をつけ、ニュースを見る。もちろんそこにはデジモンが映っていたわ。

電源をつけたのと同時に太一さんはテレビを見て驚いていたわ。

「!?　メラモンにシードラモン。異常気象の所為なんかじゃない！全部デジモンの影響なんだ！」

「お兄ちゃんも見えるのね。」

やはり太一さんはヒカリちゃんの言葉に驚いているわね。

私もヒカリちゃんの隣に行き、

「太一さん。私も見えるのよ。」

「紫苑お姉ちゃん以外、誰も信じてくれなかったの。」

太一さんの顔は驚きの顔でいっぱいね。

（ドッカーーーーーーン！！）

太一さんが驚いているのと同時に、外から巨大な爆発音がして、家が大きく揺れる。

「大丈夫？ヒカリちゃん。」

「うん。ありがとう紫苑お姉ちゃん。」

太一さんの方を見るとまたまた驚きの顔をして外を覗いていたわ。

「危ないからここで待ってろ！」

「太一！」

「あぁ！」

太一さんはコロモンを持って外へ出て行ったわ。

私もデジヴァイスを持ちヒカリちゃんを連れて外に出たわ。

「「太一さーーーん！（お兄ちゃーーーん！）」」

太一さんの方を見ると、原作でお馴染みのドリモゲモンを見つけたシーンだわ。

「俺は危ないから家で待ってろって言ったはずだ！」

太一さん、心配はありがたいけど、急に出て行った太一さんも危ないのよ？

「太一あれ！！」

コロモンが向いているほうを向くと、横断歩道のさきにはオーガモンが居たわ。

「（ルナモンは最終手段よ。一応準備ね☆）」

「（ＯＫ！）」

信号が青になるとオーガモンが襲い掛かってくるからデジヴァイスの中に居るルナモンに伝えておいたわ。

信号は青になったからオーガモンはコロモン目掛けて襲い掛かってきたわね。

「コロモンは！？」

「あそこ！」

ヒカリちゃんが太一さんにコロモンの居場所を指差して教えた。

「コロモン！大丈夫か！？」

「コロモン進化ァァァ！！アグモン！！」

アグモンはオーガモンに向けてベビーフレイムを撃ち、オーガモンを上空に浮かんでいるデジタルゲートへと飛ばしたわ。問題は太一さん。

「アグモン！」

太一さんは待てよ！言ってるような感じだけどアグモンは気にせず言う。

「太一、紫苑、ヒカリ・・・バイバイ。」

そう言うとアグモンはデジタルワールドに消えていった。

「俺も行くよアグモン！」

太一さんが行こうとしていたから私は太一さんの手を掴んだわ。

「良いの？その道を進んで、後悔しないのね。」

「あぁ。勿論だ！」

太一さんが笑顔を向けてきたので私は太一さんの手を離したわ。

「お兄ちゃん！待って！」

「紫苑、お前にヒカリを頼んだぞ！」

「えぇ！勿論よ！」

太一さんはデジタルワールドに行き、私とヒカリちゃんは一度、八

神家に戻ったわ。

「これからが・・精神的に、やばくなっていくのよね。」

第7話　『ｐａｒｔ7☆』（前書き）

改めてデジモンシリーズ見ました！

懐かしいですね♪

私が1歳～2歳の時でした。

今回は以上に短いですが第7話スタート！！

第7話　『ｐａｒｔ7☆』

ｓｉｄｅ紫苑

太一さんたちがデジタルワールドに戻り私たちはすぐに家に帰ってきたわ。

「ヒカリちゃん、ドーナツ一緒に食べよう？」

「…うん。」

やっぱり寂しいわよね。太一さんとアグモンが居なくなると・・・。

「ヒカリちゃん。」

「！？」

私は元気のないヒカリちゃんをゆっくりと抱きしめてあげたわ。だって元気のないヒカリちゃんなんて私は嬉しくないもの。

「ヒカリちゃん。悲しい顔しないで？またすぐに会えるんですもの。ね？」

「うん。」

私はヒカリちゃんを包み込んであげたわ。

（ガチャ）

「ただーいま！紫苑ちゃん・ヒカリ、大人しくして・・た・・。」

これは見られても良いものなの？

「あ、気にしないで下さい。ヒカリちゃんが寂しそうにしてたので・・。」

「そ、そうなんだ。ありがとね、紫苑ちゃん。」

ヒカリちゃんが寂しそうにしていたのは嘘ではないものね。

「いえ、ヒカリちゃんを1人にしては置けなかったものですから、お気になさらずに。」

「また遊びに来て頂戴ね！」

「はい。それでは。」

私は次に起こることを知っていたから八神家を後にしたわ。

私の部屋の前を通るときにポストを見ると手紙が1通入っていたわ。

誰かしら？

・・・

・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

あぁ。あの神からね。

『久しぶりじゃのぅ！元気しとったか？わしはピンピンしとるぞ！それでお主の行動は全部見ておるがわしと八神ヒカリ比べて、会話の時の態度とお主の性格が全く違うではないか！差別しておるのか！？ずるいであろう！それとお主に一言いっておくが、八神家にデジヴァイスと紋章を忘れ取るぞ……。

ｂｙ神様より♪』

私の行動全部見てるって、ストーカー行為で訴えるわよ？それにヒカリちゃんと貴方を差別してるわけじゃないわ。

その人に合った対応をしてるだけなのよ？

あと最後の方の文章・・・。

私はポケットや鞄を確認したわ。この神の言うとおりデジヴァイスと紋章を八神家に・・・。

たまには手紙（メール）の返事もしないといけないわね。

第7話　『ｐａｒｔ7☆』（後書き）

そのあと紫苑は八神家にもう一度お邪魔してデジヴァイスと紋章を取りに行ったとさ。

ついでにチーズケーキも食べたとさ。

第8話　『ｐａｒｔ８☆』（前書き）

まさかの更新遅れですね、はい。

これからはいっぱい更新するぞぉ！！

第8話　『part8☆』

side紫苑

私は八神家を出た後、電車で光ヶ丘に来たわ。

「太一さんたちは・・？」

「今来たよ！」

ルナモンが元気よく答えてくれたわ。

そしたら光ヶ丘の停留所にバスが止まりバスから何人かの子供達が降りてきた。それはきっと太一さんたちね。

「まだ太一さんにはバレるわけには、いかないわ。」

でも、マンモンとの戦いは周りに被害を及ぼすから見ていなきゃいけないのよね。

「マンモンとも戦いだけ見ましょう。」

「うん♪」

生で見るとマンモンとガルダモンの戦いは凄まじいわね。

周りの建物が次々と破壊されていくわ。

ガルダモンは【シャドーウィング】をマンモンに放ち、マンモンを倒したわね。

「無事にマンモンを倒したから戻りましょう。」

「もういくの？」

「此処にきたのは太一さんたちの様子を見に来ただけなのよ。」

「は～い。」

side太一

「『現実世界（リアルワールド）には選ばれし子供が2人居るのじゃ。ヴァンデモンはその2人を抹殺する為に現実世界に行ったのじゃよ。』」

俺はゲンナイのジジイに言われた事を思い出してみた。

俺たちが選ばれし子供になった共通点は・・

1⇒4年前は光ヶ丘に住んでいてお台場に引っ越してきたこと。

２⇒４年前に光ヶ丘でデジモンを見ていたこと。
この２つだ。ヒカリは４年前俺と一緒にデジモンに会い、戦いも見ていた。光ヶ丘にも住んでいた。
でも紫苑はどうなんだ？ずっとお台場に住んでいて４年前にデジモンを見ていない。
だけどデジモンのことを知っている。もしかして２人の選ばれし子供って・・・
「ヒカリ、紫苑・・・？」
でもあいつらにはデジモンが居なかったしなぁ。
わけわかなくなってきた！後で考えよう！

第8話　『ｐａｒｔ８☆』（後書き）

短かったのですが、次回もお楽しみにっ！

第９話　『ｐａｒｔ９☆』（前書き）

紫苑、１部の性格崩壊です！

ｐａｒｔ９☆スタート！

第9話　『part9☆』

side紫苑

私は家に帰るためにお台場に帰り、勿論アイツの横を通らなければならないわ。

「紫苑。あそこで子供達に囲まれて手品しているのデジモンだよ？」

やっぱりルナモンが教えてくれたわ。でも私はあのデジモンを尊敬しているの。

だからこそ横を通りたくない。それに私はヒカリちゃんのデジヴァイスも持っているもの。

他の道はないわ。こうなったら本当に行くしかないわね。

「ルナモン。私がウィーザーモンに見つかっても声を出したりしないでね。」

「OK！！」

私がルナモンに忠告をすると聞き入れてくれたわ。

私は普通にウィーザーモンの横を通ったわ。なるべく怪しまれないようにね。

でも・・・

「君、ちょっと来てくれ。」

はぁ・・・。反応が早いわよ、ウィーザーモン。

私はそう思いながら頷きウィーザーモンについて行ったわ。

私は誰も居ない空き地に連れてこられてしまったわ。

「私に何の用かしら♪今急いでいるのよ♪」

急いでいるのは本当なのよね。

「単刀直入に聞くが、君はこの世界に残っていた8人目の選ばれし子供なのかい？」

まぁ8人目はヒカリちゃんだけど、私ではないわね。

「私は8人目じゃないわよ？」

「しかし私の持っている紋章は君に反応している。」

ヒカリちゃんのデジヴァイスは私が持っているけど、本当のことを教えるわけにもいかないしね。

「内容が良くわからないわよ。それと貴方初めて見るけど・・・。」
ここまで言わないとウィザーモンは返してくれそうにないわね。
「いや、しかし。」
「その紋章って本物なの？コピーとかじゃないの？」
コピーってことは本当なのよね。
「コピーだったらバグってるんじゃないかしら♪」
「バ、バグってる・・・・・・。」
言いすぎたかしら？もう少し言ってみましょう。
「良い？確実に反応するコピーだからって所詮はコピーなんだから☆外れる時だってあるわ。…じゃ、人探し頑張ってね♪」
「・・・・あ、あぁ・・・・。」
あっさり逃れたわ。ウィザーモンが放心状態になっているような？まぁいいわ。

ｓｉｄｅウィザーモン

あの子は8人目には見えなかったが・・・。
只の天然者だろう。
しかしなぜだ？なぜ彼女は普通に話してくる？
私のことも全て知っているようだが・・・。
ここは少し、彼女を調べてみよう。

ｓｉｄｅ紫苑

やっと家に着いたわ。ウィザーモンに会うならもっと先にして欲しかったわ。
あ、またポストに入っているわね。
『紫苑よ！ちと怒られるかもしれないが・・・』
「え。これで終わりなの！？続きは！？」
もう1度ポストの中身を見てみるともう1通手紙が置いてあるわね。
『実はなぁ…。お主を9人目の選ばれし子供に設定したんじゃ。お主の許可を得ずに勝手にやってすまぬな。まぁお主が選ばれし子供

になってもこれからの行動は変わらんであろう。それじゃ宜しく☆』

あ、あの駄目神ねぇ！！何してくれるのよ！

「はぁ。ここ最近、ついてないわね。」

もう最悪だわ。私は愚痴りながら家に入ると私のデジヴァイスから

ルナモンが出てきた。

「さっきの紫苑、別人に見えたのは気のせい？」

「あのくらいが丁度良いのよ。」

まぁ確かにあれは恥ずかしかったわ。

あ、そうだ。

「そういえば明日は・・・。」

「紫苑、明日は何かあるの？」

「ちょっとヒカリちゃんの所にいくからまたデジヴァイスに入って

てくれないかしら。」

「うん、いいよ！」

私がそう言うとルナモンはデジヴァイスに入ってくれたわ。

さて、ヒカリちゃんの所に行きますか！

（ピンポーン）

インターホンを押すとヒカリちゃんが出迎えてくれたわ。

「あ、紫苑お姉ちゃん。どうしたの？」

「実は、明日一緒に出かけようかなと思ってね。…どう？」

ヒカリちゃんは暫く考え、

「うん！私、紫苑お姉ちゃんと出かけたい！」

「それじゃお母さんに言ってみよう。」

私とヒカリちゃんは、ヒカリちゃんのお母さんに話してみたわ。

「――――と言うことなんですけど、良いでしょうか。」

「勿論よ！明日、ヒカリちゃんを宜しくね☆」

「はい！」

（ただいまー！！）

丁度、ヒカリちゃんのお母さんとの話が終わると太一さんが帰ってきたわ。

もう夕方だし、家に帰りましょう。

「あ、紫苑。」

「はい、なんでしょうか？」

「話があるから来てくれ。」

え・・。話って、良い話ですか、悪い話ですか。

強制的に太一さんの部屋に連れて行かれてしまったわ。

「紫苑。お前、４年前にあった光ヶ丘の爆弾テロ事件のこと覚えているか？」

そういう事ね。

第１０話　【ｐａｒｔ１０☆】（前書き）

やっと１０話だぁぁぁ！！

よし、次は２０話目指すぞぉ！

ファイト、オー！！

紫苑「早く始めて頂戴。」

はい。

第１０話　【ｐａｒｔ１０☆】

ｓｉｄｅ紫苑

「紫苑。お前、４年前に起こった光ヶ丘爆弾テロ事件のことを覚えているか？」

そういうことね。

私を８人目か９人目と疑っているのね。

「はい。知っていますよ。２体のデジモンが光ヶ丘で戦っていた事件のことよね。」

「あぁ。」

「その事件がどうかしたの？」

「あ、いや、何でもないんだ！呼び出したりしてすまなかった。」

あれ？もう良いの？

なんとなく説得力が足りないというか・・・。

まぁ良いとしましょう。

「それじゃあ、私は帰るので。」

私は太一さんに挨拶をしてから八神家をあとにして家に帰ったわ。
家に帰ってデジヴァイスからルナモンを出し、ケーキをテーブルに置いたわ。
「ここ最近ずっとデジヴァイスの中だから、そのご褒美よ。」
「良いの！？このケーキ食べて良いの！？」
「えぇ、勿論よ！」
良かったわ。ルナモンが喜んでくれて。
あ、そうだ。
「ルナモン。今晩、東京湾にレアモンが出現するんだけど手伝ってもらえるかしら？」
「もちろんだよ！」
良かったわ。これで今晩は８人目と９人目を演技できるわね。
ｓｉｄｅ太一
紫苑も光ヶ丘の事件の事を知っていた。

さすがにデジモンの種類までは言っていなかったが、デジモンのことを知っている。

ヒカリに聞いたらデジヴァイスは持ってないって言っている。

だから紫苑とヒカリが8人目と9人目の可能性は低くなる。

「訳わかんなくなってきた！」

「どうしたの？太一。」

コロモンか。

「俺さ、ヒカリと紫苑が残り2人の選ばれし子供だと思うんだ。」

「え！？それ本当に！？」

あ、大声出すな！

俺は少々焦りながらコロモンの口を押さえた。

「確証はないんだ。ヒカリと紫苑はコロモンの事を知っていたし。ヒカリは4年前に俺とデジモンを見ている。紫苑は親が居ないから他のところに住んでたけど、デジモンのことは知っている。だから俺は、ヒカリと紫苑が8人目と9人目なんじゃないかって思うんだ。」

「よくわからない。だけど僕は太一のことを信じてみるよ！」

コロモン、ありがとな。

「そうだな、ありがとう。」

ｓｉｄｅ紫苑

私とルナモンは晩ご飯を食べ終え家を出る。

なぜならば、もうすぐ東京湾にレアモンが出現するからね。

「もう一度確認するわよ。私がルナモンに私のデジヴァイスを渡すから、私が合図したら、私と反対の道を行く。」

「その後上手く逃げ切れたら、紫苑と合流する。」

私が最初に言うと続けてルナモンが話を続けたわ。これなら大丈夫ね。

「さ、行くわよ。」

私はルナモンを抱えタクシーに乗り、東京湾に行ったわ。

因みに私は、顔が見られていいように、縦ロールにしているのをストレートにし、髪につけている花のアクセサリーを外したわ。

ストレートにすると、改めて髪が長いことに気づいたわ。

まぁ日本に私みたいな金髪の髪を持つ人は少ないからストレートにしてもばれるリスクは高いわね。

なんか、デジモンフロンティアの泉ちゃんに似ているわ。

タクシーの運転手には、

「こんな夜遅くにお譲ちゃん一人で東京湾に行って何するんだい？」

と聞かれたが、

「東京湾の近くに家があるんです。」

って言ったら納得してくれたわ。

さて、此処からがよね！

「ルナモン、これ私のデジヴァイスよ。上手く逃げ切ってね。」

「ＯＫ！！任せて！！」

私たちはそれぞれの道を走り始めたわ。

私が走っていると、ヒカリちゃんのデジヴァイスが反応し始めたわ。

さぁ、うまく見つけてくださいね！！

光子郎さん！

ピコデビモン！！

ｓｉｄｅ光子郎

僕はゲンナイさんにもらった機能で、デジモンが現れた事を知りました。

デジモンが東京湾に現れた事を皆さんに連絡するため、電話を掛けました。

しかし、皆さんは疲れて寝ているそうです。

仕方がないので僕はカブテリモンに乗って東京湾に行きました。

そこにはレアモンと言うデジモンが居ました。

すると、突然デジヴァイスが反応しました。

「光子郎ハン！ここはワテに任せて光子郎ハンは追いかけて下さい

！！」

ありがとうございます！カブテリモン！

「レアモンは頼みました！」

僕はもう一度デジヴァイスを見ました。

そしたらデジヴァイスには２つの反応がありました！

「９人目も近くに居るんだ！」

ｓｉｄｅ紫苑

「あ、ルナモンの方に反応が行ってるわね。」

ってことは私の方に来るのは・・・

「『ピコダーツ！！』」

あ、危ないわね。

でもこういう時のためにあの神から、『アレ』を貰っているのよね。

私が転生する前は射撃を習っていたから、銃は使えるのよね。

それと、あの神が言うには転生者だから銃の免許は取っていることになってるらしいわ。

私は知らなかったけど。　（ご都合主義で申し訳ありません）

・・・この銃は『散弾銃』ね。

「待て！『ピコダーツ！！』」

試しに撃ってみようかしら。

（ッッッッ！！）

あれ？サイレンサーでも付いているのかしら？銃声が全く聞こえないわ。

「見事に命中したわね。」

ピコデビモン、気絶してるわ。

なるほど。対デジモン用なのね！

ｓｉｄｅ光子郎

僕が追いかけたほうは動くのが早いので先回りしました。

「追い詰めましたよ！」

え！？

で、デジモン！？

僕が見たのはウサギのようなデジモンでした。

「追い詰められちゃった！…ゴメンね！『ティアシュート！！』」

「くっ！」

そのデジモンは僕の足元にアワを放ってきました。

煙がなくなるとそのデジモンは居なくなっていました。

ｓｉｄｅ紫苑

私、この銃要らないんだけどね。

あ！？

そうか、その時に使えば良いのよね！

「紫苑！」

「どうだった？」

「小さな男の子に見つかったから逃げてきたよ！」

小さな男の子って光子郎さんのことね。

じゃあ成功ね！ルナモンには家に帰ったらご褒美をあげなきゃね。

「それじゃ、帰りましょう？」

「うん！」

夜遅くに小さな女の子がタクシーやバスに乗ると怪しまれるので私とルナモンは歩いて家に帰ったわ。

ｓｉｄｅ光子郎

「光子郎ハン、元気だしなはれ。収穫が合っただけでもいいやないですか。」

カブテリモン……

確かにそうだね。

「明日、皆さんにこのことを知らせないと！！」

第１０話　【ｐａｒｔ１０☆】（後書き）

今回は、ご都合主義をだしてしまいました、すみませんｍ（＿）ｍ

気を取り直して、次回もお楽しみにっ！

第１１話　『ｐａｒｔ１１☆』

ｓｉｄｅ紫苑

８人目と９人目を演技した翌日。

「今日はヒカリちゃんとお出かけでしょ？」

「えぇ。ただの出かけるじゃないけどね。」

今日は、ヒカリちゃんと出かけてテイルモンに会う予定ね。

「さ、もう行くからデジヴァイスに入ってね。」

「ＯＫ！！」

私は『砂色のワンピースの上に長袖で退紅(あらぞめ)色のカーディガン』の着て外に出たわ・

勿論、髪型は縦ロールで花のアクセサリー（髪につけるもの）を付けてね。

＞ｉ３２８５４―４１７５＜

【挿絵：花音】

外に出ると、ヒカリちゃんがインターホンを押そうとしている時だ

ったわ。

「今日のヒカリちゃん、可愛いわね。似合ってるわよ。」

ヒカリちゃんも少しオシャレをしていたわ。

「紫苑お姉ちゃんもとっても可愛いね！」

ヒカリちゃんに言ってもらうと嬉しいわ。

「それじゃ、行きましょ？」

「うん！」

私はヒカリちゃんの手を握り、一緒に出かけたわ。

テイルモンと会うところに来たけど、かなり早すぎたわね。

「ヒカリちゃん。」

「何？」

「熱中症になったら困るから、帽子を買いましょう？」

「うん！」

確かに熱中症になったらたまったもんじゃないわね。

帽子屋に行き、私たちは帽子を選ぶことにしたわ。

「何がいいと思う？」

私はヒカリちゃんに気づかないようにルナモンに話しかけたわ。

「（紫苑だからベレー帽が似合うよ！）」

ルナモンがベレー帽の方が似合うよ。と言ってくれたので、私は茶色のベレー帽を被ってみたわ。

「ヒカリちゃん。ベレー帽、似合うかな？」

「似合ってるよ！紫苑おねえちゃん！」

ヒカリちゃんも似合うと言ってくれたので、私はベレー帽を買うことにしたわ。

ヒカリちゃんはリボンつきの『カシラ』という帽子を買ったわ。

その後私とヒカリちゃんはテイルモンとすれ違う場所に行ったわ。
丁度、前方からテイルモンが来て、ヒカリちゃんが話しかけたわ。
「貴方アグモンのお友達？」
「ヒカリちゃん。”今は”違うんだよ、あのデジモン。」
「そうなんだ。」
私は一言ヒカリちゃんに言ったわ。
テイルモンはすぐに猫のまねをしてどこかへ言ってしまったわ。
「次は東京タワーに行きましょう？」
「うん！」
私はそう言って東京タワーに向かったわ。

ｓｉｄｅテイルモン

どうしてあいつ等がデジモンのことを！？
だが、あの茶髪の女。私は知っているような気がする・・。

「考え事ですか、テイルモン？」

アイツか。

「人の考えを読むなと言っているだろ、ウィザーモン！！」

何回コイツに言えば良いんだか。

「今は話があって来たのですよ。」

「話？」

「9人目らしき人をつけていまして・・・。」

9人目だと！？

「誰だ、ソイツは！？」

「貴方を知っていた、金髪の女の子です。」

「しかしなぜソイツ9人目だとわかるんだ？」

「あの子から、デジヴァイスの反応があるんですよ。」

デジヴァイスの反応だと！？

しかし・・・

「だがあいつにはデジモンが・・！」

「居ますよ。私は昨日、一日ずっとあの子をつけていました。その結果、あの子が持っていたデジヴァイスからデジモンが出てきたのです。」

デジヴァイスにデジモンを収納できるのか！？

「それからレアモンが東京湾に出現した時、ピコデジモンと接触してしまったんです。」

確かに、ピコデビモンが向かったと聞いたな。

「彼女は銃ケースから対デジモン用の銃を取り出し、一発で命中させました。」

「なぜ人間がそんな物を持っているんだ！？」

人間が対デジモン用の銃を持っているなどありえん！

「驚くのはまだです。私は彼女の心を読み取った結果。私とテイルモンがあった時の記憶、テイルモンの生き様などを知っていました。」

なんだと！？なぜそんなことを知っているのだ！

「詳しくはもう一度彼女に接触してからです。私はあの子達を尾行し続けますが貴方は来ますか？」

当たり前だ。

「勿論だ。気になる事もあるしな。」

それとあの茶髪の女、なぜだろう？

ここまで気にしたことは無かったぞ。

第１１話　『ｐａｒｔ１１☆』（後書き）

疲れたぁ・・・。

紫苑の髪がおかしくなったと思いますが、気にしないで下さい

頑張った！！

描くのに何時間も掛けた甲斐があった☆

第１２話　『ｐａｒｔ１２☆』（前書き）

なるべく同じ気持ちになってほしく、東京都の写真を挿入したりします！

ｐａｒｔ１２☆スタート！！

第１２話　『ｐａｒｔ１２☆』

ｓｉｄｅ紫苑

テイルモンと別れた後、私たちは東京タワーにやって来たわ。

＞ｉ３２９３９―４１７５＜

「やっぱり大きいね！」

確かに大きいわね、東京タワー。

そろそろアイツが出てくると思うのだけれど・・・。

「紫苑お姉ちゃん！展望台に行こう！」

「えぇ、いいわよ♪」

私とヒカリちゃんは、展望台に行ったわ。

＞ｉ３２９４１―４１７５＜

「やっぱり展望台は良いわね。」

私はヒカリちゃんと歩こうとしたら、急に気温が高くなったわ。

後ろを見たら、コートを着たデスメラモンが立っていた。

「ちょっと、何でこんな暑いのにコートなんか着てんのよ！！」
文句を言ってる女の子・ミミさんが、デスメラモンに聞こえる位の大きな声で言ったわ。
ミミさん、それは良くわかりますが言って良い事と悪い事があるんですよ？
それを聞いたデスメラモンは、コートを焼いて正体を現したわ。
私は直ぐにヒカリちゃん連れて外に出たわ。
「紫苑お姉ちゃん、どうしたの？」
「デジモンが東京タワーに現れたのよ。もしずっと居たら戦いに巻き込まれるかもしれないわ！」
私はそう言いながら、ルナモンをデジヴァイスから出したわ。
「ルナモン頼むわ！」
私がそう言うと、デジヴァイスが光りだした。
「『ルナモン進化ァァァ！レキスモン！！』」
「紫苑お姉ちゃんにもデジモンが……」
ヒカリちゃんはレキスモンと私を見て驚いていたわ。

「ヒカリちゃん…。話はあとで話すから、今は隠れてましょう！レキスモン、お願い！」

「ＯＫ！！」

レキスモンはそう言うと、デスメラモンの所に行ったわ。

ｓｉｄｅテイルモン

「やはり彼女が九人目でしたね……」

ウィザーモンの言う通り、金髪の女が九人目だった。

「しかし、なぜあいつのデジヴァイスだけが他の奴らと違う？」

同じ選ばれし子供でも、デジヴァイスが違う。

「他の選ばれし子供のデジヴァイスと彼のデジヴァイスは、造りだされた時から違うのでしょう。」

確かに、デジヴァイスは子供の心によって造りだされる物。

「それに先程、私は彼女の心を覗いたと言いましたよね？彼女の心の中は凄い事だらけでしたよ。」

……凄い事だらけだと？どう言う意味だ。

「彼女は貴方のことも全て知っていると言いました。あれは彼女の心に映し出されていた物でした。」

まさか・・！？

「じゃ、じゃあ、アイツは……」

「我々の事を全て知っていると思って良いでしょう。」

このことについては、詳しく知らべないとな。

「ウィザーモン、ヴァンデモンにはまだ報告するなよ。」

「勿論。私は貴方に協力するだけです。

ウィザーモンと私は九人目とあの茶髪の女を再び観察し始めた。

ｓｉｄｅ紫苑

私とヒカリちゃんは東京タワーの裏側に行き、デスメラモンの戦いを見ていたわ。

「紫苑お姉ちゃんもお兄ちゃんと一緒？」

私はイレギュラーだから本当は違うのだけれど、あの神のせいでな

ってしまったわ。

「うん。そうね。」

転生した事をいえないので、こんな返事しか出来ないわ。

「…。そうなんだ。」

そんな会話をしていたら、太一さん達がカブテリモンに乗ってやってきたわ。

ｓｉｄｅ太一

俺はカブテリモンに乗ってデスメラモンの所に来た。

そこにはバードラモンとトゲモンが居たけど見た事ないデジモンも居た。

「あのデジモン？」

「少し待ってください…。あれは、レキスモンと言うデジモンみたいです。この状況からすると８人目か９人目のデジモンだと思います！！」

じゃあ、何処かに選ばれし子供が居るんだな！！

俺は東京タワーを単眼鏡を使って見た

「ヒカリに……紫苑……だと。」

東京タワーの裏側に紫苑とヒカリが居た。

紫苑の手にはデジヴァイスが握られていて、紋章もあった。

やっぱり、アイツ等が8人目と9人目だったんだ……

何でアイツ等は、俺に言わなかったんだ？

「太一さん！今はアイツを倒す事が先決です！！」

光子郎が俺に注意をしてくれた。

「行くよ、太一！！」

アグモンはそう言って、カブテリモンから飛び降りた。

すると、俺のデジヴァイスが光りだした。

「『アグモン進化ァァァ！グレイモン！！』」

アグモンはグレイモンに進化し、デスメラモンに飛び蹴りをした。

デスメラモンは、グレイモンに蹴られて後ろに倒れた。

「『メガフレイム！！』」

「『メテオウィング！！』」

「『チクチクバンバン！！』」

デスメラモンは3体の攻撃を喰らうのではなく、逆に吸収して大きくなった。

「こ、このままじゃ負ける！！グレイモン！！」

「分かった！！」

俺がグレイモンに叫んでグレイモンが頷くと、俺のデジヴァイスと紋章が光った。

「『グレイモン超進化ァァァ！！！メタルグレイモン！！』」

俺はグレイモンを超進化させ、メタルグレイモンにした。

「早く決着を付けてくれ！！メタルグレイモン！！！」

早く倒さないと、紫苑たちが何処かへ行ってしまうから！

「何もかも燃やしてやる！！」

デスメラモンがそう言った瞬間、レキスモンがデスメラモンを上空に蹴り飛ばした。

「今だ！！」

俺がそう言うと、メタルグレイモンの胸のハッチが開いた。

「『ギガデストロイヤー！！』」

メタルグレイモンの胸のハッチから二つのミサイルが出てきてデスメラモンに直撃した。

そしてやっとデスメラモンを倒した。

デスメラモンが倒されると、レキスモンが東京タワーの裏に走って行った。

「メタルグレイモン！！」

俺はメタルグレイモンの背中に飛び乗って東京タワーに降りて紫苑たちの所に向かった。

「ヒカリ！紫苑！」

俺がそう叫ぶと紫苑とヒカリ、そしてレキスモンじゃないデジモンが一体居た。

第１２話　『ｐａｒｔ１２☆』（後書き）

眠い・・・。

１０月１６日は吹奏楽部の引退コンサートだ・・・。

３年生に泣いてもらうぞ！！！

第１３話　『ｐａｒｔ１３☆』（前書き）

今日は引退コンサートがありました。

とても感動的！！

第13話　『part13☆』

side紫苑

あんな大胆な行動をするしたら、ばれるリスクが急上昇するのがわかっていたわ。

・・・・・だから、ばれてしまったのね。

「紫苑、ヒカリ、どうして俺に、選ばれし子供だって事を黙ってたんだよ？」

私の周りにはウィザーモンとテイルモンが見張っていると思ったから言えなかったんですよ。

ヒカリちゃんは、太一さんの言葉を理解していない顔ね。

「2人とも答えてくれ！ヴァンデモンはお前達の命を狙ってんだぞ！！」

「太一さんこっちにも事情があるんです。へたに話せばヴァンデモンにもばれてしまうのよ。」

「そうかもしれないが、俺にだけでも話してくれれば協力してたんだぞ！」

協力してくれるのはありがたいけど、太一さんに話せば私が転生者

だってこともばれる可能性が高いから言えなかったのよ。

「……お兄ちゃん、私はデジヴァイス持っていないよ。」

ヒカリちゃん、わけがわからないって顔してるわね。

そう言えば、ヒカリちゃんのデジヴァイスは私が持っていたのよね。

ヒカリちゃんに返さないといけないわね。

「ヒカリちゃんのデジヴァイスは私が預かっていたのよ。だからこのデジヴァイスを返すわ。」

私は鞄の中からヒカリちゃんのデジヴァイスを出して、ヒカリちゃんにデジヴァイスを渡した。

「な、何で紫苑がヒカリのデジヴァイスを!?」

太一さんが、驚きながら私に聞いてきた。

……もう限界ね。

やっぱり、隠し通すことは無理だったわね。

話しますか、私のことを・・。

「それは私が『転生者』だからよ。」

「「転生者?」」

太一さんとヒカリちゃんが、声を揃えて聞いてきたわ。さすが兄妹(きょうだい)ね。

私は話したわ。

私が一度、死んだ人間である事を……

私がこの世界にきた転生者だと言う事を……

私は本来、この世界にはいない事を……

この世界が原作である事を……

パートナーであるルナモンの事を……

私の秘密の全てを太一さんとヒカリちゃん話した……

「……これが私がこの世界に転生した理由であり、存在です。だからどんな接し方でも良いのよ。」

「「・・・。」」

「私は覚悟の上できたのだからね・・。」

私は二人にそう言って笑ったわ。

転生者は必ずしも、その世界に受け入れてもらえるとは限らないもの。

転生した時から覚悟はしていたわ。
原作に転生すると言う事は、自分が転生者だとバレるリスクがあったからね。
それを覚悟で私はこの原作に転生した。
でもバレるのが速かったわね。
悲しい筈はないのに……
強気で覚悟はしていた筈なのに……
どうして、
どうして、
どうして涙が出てくるのよ！！

「紫苑お姉ちゃん！」
ヒカリちゃんは、泣いて無理矢理笑っている私に抱きついてきたわ。
「ヒカリちゃん？私に抱きついてくるということは、私の運命を受け入れることなのよ。」
分からないわ。どうして抱きついてくるのかがね。

私は普通の、人間じゃないのに。

転生者＝一度死んだ人間、なのに。

なのに……

どうして抱きついてくるのかがわからないわ。

「紫苑お姉ちゃんが一度死んでいても、私が大好きな紫苑お姉ちゃんには変わりないよ！」

ヒカリちゃんは笑顔で答えてくれたわ。

そっか、だから・・・。

「紫苑。お前がこの世界に転生してくれたおかげで今の俺は在る。だから自分を責めないでくれよ。」

太一さんもヒカリちゃんも、私の運命を・・・。

私はなんて馬鹿なの！？

原作を知っていても、いろんなデジモンを助けてないじゃない！

結局、周りに誰も居なきゃ何も出来ないじゃない！

何が第二人生（セカンドライフ）よ。

……絶対に生まれ変わるわ！

もう二度と、後悔しない為に、こんなことがないように！

「私の運命を受け入れてくれてありがとう。私は生まれ変わるわ。」

私はヒカリちゃんと太一さんに誓ったわ。

これからは自分から逃げようと考えない為に。

「よろしくな、紫苑。」

「これからもヨロシクね、紫苑おねえちゃん！」

二人は笑顔で私にそう言ってきたわ。

私は二人の笑顔を見て、私も笑顔になって二人を見た。

「宜しく♪」

私は絶対にこの世界を『ＨＡＰＰＹ　ＥＮＤ』で終わらせるわ！

第１３話　『ｐａｒｔ１３☆』（後書き）

頑張った！

明日は学校・・・。面倒だぁ。

第１４話　『ｐａｒｔ１４☆』（前書き）

そういえば、クロスウォーズ３期に歴代主人公が登場するんですよね？

確か最初に出てくるのは『一乗寺　賢』ですね。←かなり不安。

いつ出てくるかは未定ですけど・・・。

第１４話　『ｐａｒｔ１４☆』

ｓｉｄｅ紫苑

「太一さん、私とヒカリちゃんが選ばれし子供だという事は、他の人には秘密にして欲しいの。」

「な、何でだよ？」

やっぱりそんな返事よね。

でも、秘密にしてもらいたいのよね。

ちゃんと詳しく説明しないといけないわね。

「ヒカリちゃんのパートナーデジモンが居ないのに、皆さんに話したらどうなると思いますか？」

「えっと・・・。」

「絶対にヒカリちゃんのボディーガードをしてしまうわ。そんなことをしたらヴァンデモンに気づかれてしまうと思ったからよ。」

私がそう言うと、太一さんは頷いて理解した顔をしたわ。

けど、直ぐに太一さんは頭に“？”マークを浮かべたわ。

「成る程な。でも、何で紫苑の事も秘密にしてなきゃいけないんだよ？」

成る程ね。

私の事を秘密にする理由が分からないのね。

「私の事は自分で皆に言いたいの。それが私の、転生者のやるべきことだからね。」

太一さんに頼るのではなく、私の口から伝えたい。

どんな接し方をされても、私が自分で皆に伝えると決めたから。

これが秘密にしてほしい理由よ。

私は太一さんに説明すると、太一さんは納得したわ。

「分かった。選ばれし子供ってのは黙っておくよ。…だからヒカリを頼むぜ！」

太一さんは私にヒカリちゃんを頼んでくれたわ。

頼まれたら・・・やるしかないわね。

「もちろんよ。ヒカリちゃんは任せて頂戴。」

「太一ー！何処ー？」

「太一さーん！何処ですかー？」

私が太一さんに言った瞬間、アグモンと光子郎さんの声が裏から聞こえてきたわ。

「太一さん、アグモン達の所へ行きなさい。私とヒカリちゃんは戻るから。」

私がそう言うと、太一さんは頷いてくれたわ。

「解った、ヒカリの事を頼むな！」

太一さんはそう言って、アグモン達の所に走って向かったわ。

「ヒカリちゃん。帰りましょう？」

私がヒカリちゃんに聞くと、ヒカリちゃんは私の手を握ってきたわ。

「じゃあ、早く帰ろう！紫苑お姉ちゃん♪」

ヒカリちゃんは、笑顔で言ってきたわ。

やっぱり可愛いわね、ヒカリちゃんは・・・。

「そうね♪」

私はヒカリちゃんと手を繋いだまま東京タワーを後にしたわ。

ｓｉｄｅ太一

「太一、何か良い事でもあったの？」
アグモンが顔を傾けながら俺に聞いてきた。
「良くわかったな。アグモン。」
俺がそう言うとアグモンは笑って答えてくれた。
「太一の顔、朝の時と比べると凄く嬉しそうな顔だから。」
確かにアグモンの言う通りだな。
悩んでいたことがさっき解決したからな！
「確かに、凄く良い事があったぜ！」！」
俺がそう言うと、アグモンも喜んでくれた。
「それは良かったね！それで・・何があったの？」
アグモンは俺に何があったのか聞いてきた。
だが俺は紫苑と約束をした。
だから、理由は教えれない。
「秘密さ。」

俺がそう言うと、アグモンは怒りだした。

アグモンはわかりやすいな。

「ずるいよ太一！ボクにも教えてよ！！」

紫苑は「自分から伝えたい」と言った。

だから、教えられないんだ。

「いつかわかる時がくるさ♪」

「ケチー！」

俺が笑顔で言うと、アグモンは俺に愚痴ってきた。

微妙に失礼だぞ、アグモン。

俺はそう思いながらカブテリモンの背中に乗って、東京タワーを後にした。

ｓｉｄｅウィザーモン

成る程、だから彼女は私達の事を知っていたのか。

「……」

さっきから一言も喋らずに考え事をしているテイルモンが気になる。

「どうしたんですか、テイルモン？」

私はテイルモンに聞いた。

テイルモンは、何かを思い詰めた顔をしながら私に答えてくれた。

「やはりアイツ等が八人目と九人目。…たが私は、あの八人目を知っている気がする。」

先程もそんなことを言っていた様な……

そう言えば昔、テイルモンと最初に会った時に……

・・・・・・！？

「テイルモン、貴方は昔、“待っている人が居る”と言っていませんでしたか？」

「昔？そんなことを私が？」

テイルモンが聞いてきたので、私は頷いた。

「はい。貴方は私を救ってくれた時、「誰かを待っていた。ずっと、ずっと待っていた。」と言っていました。」

私の推測が正しければ、テイルモンが待っていた“誰か”とは……

「私が待っていた？・・・そっか、あんなに気になったのは、私が待ち続けた人間だからか！」

やはりテイルモンは、八人目のパートナーデジモン！！

「なら速く行きましょう、ヒカリの所へ！！ヴァンデモンに知られる前に！！」

私がテイルモンにそう言うと、テイルモンは頷いた。

私はテイルモンと一緒に、紫苑とヒカリの後を追い掛けた。

ｓｉｄｅピコデビモン

聞いちゃった！！

「まさかテイルモンが八人目のデジモンだなんてな。…まぁ良い。速くお伝えしなければ！！」

「そんなことはさせないよ！！」

俺はヴァンデモン様にこの事を伝えに行こうとしたら、後ろから声が聞こえた。

俺は振り返る前に、意識を失った。

ｓｉｄｅレキスモン

やはり紫苑の言う通り、ピコデビモンが居たね。

「取り合えず。木に縛り付けようかな？」

私は紫苑から渡されていたロープを使って、ピコデビモンを木に縛り付けた♪

「これなら、動けないよね。」

私はピコデビモンを見てそう呟いて、紫苑を追い掛けた。

ｓｉｄｅ紫苑

私は家に帰り、八神家にお邪魔しているわ。

「紫苑お姉ちゃんのデジモンって、ルナモンだったよね？」

少ししか話してないのに、ルナモンの名前を覚えるなんて、さすがヒカリちゃんね。

「そうよ。今はルナモンに頼みごとをしているけど、もうすぐで帰ってくると思うわ。」

「今帰ったよ！」

丁度、レキスモンからルナモンに退化して、窓から入ってきたわ。

「お疲れ。ヒカリちゃん、こっちが私のパートナーで・・・」

「ルナモンよ♪宜しくね、ヒカリちゃん☆」

「こちらこそよろしくね！」

ルナモンは、ヒカリちゃんに自己紹介と挨拶をした。

私はその光景を見ながら頬笑んで、窓の外を見たわ。

！？

「ヒカリちゃん。お客さんが来たそうよ。」

そこに居たのは・・・

第１４話　『ｐａｒｔ１４☆』（後書き）

太一「そういえば、紫苑って何歳なんだ？」

紫苑「転生してなかったら、２２歳よ。」

太一「と、年上でした・・。」

紫苑「敬語はいらないわ。その代わり、私も敬語はあまり使わないわよ？」

太一「ＯＫ」

第15話　『part15☆』

side紫苑

私とヒカリちゃんは、ベランダに出て、ウィザーモン・テイルモンと向き合っているわ。

「それで今日はテイルモンも一緒で私たちに何か用でもあるの？」

余裕な感じで言っているけど、内心はかなり焦っているわ。

だって本当はこの2体、今晩に来る予定なのだからね。

でも今は夕方よ。来るのが早すぎよ。

「久しぶり。君と会うのは2回目だね。」

どうせ来るなら今晩来て欲しい物だわ。

「そうね。…それで？何か用？」

私がそう言うとウィザーモンの顔が笑っている気がしたわ。

「君、長い話は嫌い？」

何よ急に、確かに嫌いよ。

「えぇ、長話は好きではないわね。」

「そうか。」

だから何よ？

「いや、今日は君たち8人目と9人目の選ばれし子供に話があってね。」

「え！？」

なぜウィザーモンがその事を知っているのよ。

私はウィザーモンたちに教えてもいないし。

太一さんが？

でも太一さんは約束を絶対に守ってくれる人よ。

だから太一さんが教えるはずないわ。

だとすれば何故？

「今日はテイルモンがヒカリに用があるんだ。」

テイルモンがヒカリちゃんに？

「ヒカリ。私はずっとヒカリを探していたんだ。でも、いつの間にかに忘れてしまったんだ。ヒカリを探しているという事を…。しかし今日全てを思い出した。ヒカリ。私はヒカリを待っていて、そし

て今日…出会うことが出来たのだ。」

「テイルモンが私を？」

成る程ね。テイルモンがヒカリちゃんに用があるのはそのことだったのね。

「ヒカリちゃん、テイルモンと一緒にデジヴァイスを触ってみて。」

「一緒に？わかった。」

私がヒカリちゃんに言うと、ヒカリちゃんはデジヴァイスをテイルモンと触ったわ。

すると原作通り、デジヴァイスが光だしたわ。

「やはりテイルモンとヒカリは結ばれるのが運命だったんだ。」

じゃあ私たちが今やることは1つね。

ウィザーモンはそう言って、何処かに行こうとしたわ。

紋章を取りに行こうとしているのね。

「ウィザーモン、紋章を取りに行くなら夜にしたら？夜はヴァンデモンが外出するだろうしね。」

私がウィザーモンに忠告をしたらウィザーモンが私を見てきたわ。

「確かに彼女の言うとおりだな。」

いい加減、彼女とか9人目とか金髪の女の子って言い方やめてほしわ。

「ウィザーモン。私には『桜木　紫苑』って名前があるの。彼女とか9人目って言わないでほしいわ。」

私がウィザーモンに言うとウィザーモンは申し訳なさそうな顔をしたわ。

「それは失礼。じゃあ、紫苑。…今晩、迎えに来るよ。」

「ヒカリ、後でね。」

ウィザーモンとテイルモンが帰ろうとしたわ。

けど・・・

「何でテイルモンが此処に居るんだ！！」

「ヒカリ！紫苑！」

太一さんとアグモンが2体を睨んでいたわ。

しょうがないわよね。

さっきまで太一さんの敵だったんですものね。

「太一さん。話を聞きなさい。」

「良いのか？敵じゃないのか？」

「えぇ、敵じゃないわよ。」

「良いの？太一。」

「あぁ。」

良かった、取り敢えず話を聞いてくれるみたいだ。

「実は・・・

（太一さん・アグモンに説明中）

――と言う事よ。」

「え！？じゃあヒカリは８人目の選ばれし子供でテイルモンがヒカリのパートナー！？」

「「そうよ（だ）。」」

・・・

沈黙が・・・。

「嘘ォォォォ！？」

沈黙の後アグモンが突然叫びだしたわ。（心臓に悪いわね。）

「あんまり大声を出すなよ！」

太一さんがアグモンに注意するとまたアグモンが喋り始めたわ。

「太一は驚かないの！？ヒカリが８人目で、しかもテイルモンがパートナーだよ！？」

まぁ太一さんは殆ど知っているからあまり驚かないと思うけどね。

「殆どのことは知ってたからな、ハハハ・・。」

太一さんはアグモンに苦笑いをしたわ。

まぁそうなるでしょうね。

「太一、僕にも教えてくれても良かったのにぃ！！」

「紫苑と約束したからな。」

ありがとう、太一さん。

「アグモンもここまで知ったんだし、紫苑も話したらどうだ？」

それもそうね。

「アグモン、本当は私も選ばれし子供なのよ。」

・・・

また沈黙ね。

「嘘ォォォォ！？」

また・・・。

「そうだ。アグモン、ヤマトたちには言うなよ。」

「どうして？」

「俺たちがヒカリたちを守ったら、ヴァンデモンに気づかれるかもしれないからな。」

私が言おうと思ったけど、太一さんがアグモンに注意してくれたから大丈夫ね。

「分かったよ、太一。」

アグモンも納得してくれたわね。じゃあ、後は・・・

「太一さん、今晩、ヒカリちゃんをお願いするわよ。」

「あぁ！絶対に帰ってこいよ！紫苑！」

もちろんよ。絶対に帰ってくるわ。

「紫苑お姉ちゃん、待ってるよ！」

待ってて頂戴。ヒカリちゃん。

「日が落ちる。行こうか。」

「行くぞ、紫苑。」

「じゃあ、行って来ます。」

私はそう言って、ウィザーモンの力でヴァンデモンのアジトに向かったわ。

第１５話　『ｐａｒｔ１５☆』（後書き）

今回も頑張った。

次回もお楽しみにっ！！

第１６話　『ｐａｒｔ１６☆』（前書き）

今回はまさかのイレギュラーが登場します！！

ｐａｒｔ１６☆スタート！！

第１６話　『ｐａｒｔ１６☆』

ｓｉｄｅ紫苑

私はウィザーモン達とヴァンデモンのアジトに来て、茂みに隠れてアジトの様子を伺っているわ。

「……見張りはやっぱりバケモンね。」

バケモンだけなら私でもいけるけど、ここはまだ様子見ね・・。

気付かれる可能性があるわ。

今日の今頃はヴァンデモンは居ない。

今頃はパンプモン・ゴツモンが渋谷で遊び、ヤマトさん達を助けてヴァンデモンに殺られテしまう日。

助けに行きたいけどルナモンの力じゃヴァンデモンに勝てないし、今日を逃せば、色んなデジモンが殺されてしまうわ。

世界のいうとおり？何かを守るには何かを捨てなければならない〃。

私はこの言葉に負けたのかしらね。

私はまたデジモンの命を救うことすら出来なかったのね。

なぜこの日と、パンプモン・ゴツモンが殺される日が一緒なの？

ずれていたら、２つの命を救うことが出来たのにね。

「紫苑。悲しいと思うが今は我慢だ。悲しいのは私やテイルモンだって同じだ。」

ウィザーモン、私の心を読み取ったわね。

でも悲しいと思うのは私だけではないわ。ヤマトさんだって絶対に思っているはずよ。

「えぇ、わかっているわ。」

私が言うと、雰囲気が変わったわ。

「よし、行くぞ。」

テイルモンが言うと、私とウィザーモンは頷き、見張りのバケモンを気絶させてアジトに入ったわ。

アジトは一本道だったので、すぐ一番下の部屋まで来たわ。

「鍵穴があるぞ。」

「さっきバケモンから拝借してきた鍵は使えるんじゃないか？」

テイルモンは、そう言って鍵を取り出し鍵穴に入れたわ。

（ガチャッ）

「開いたわね。」

「急ごう！ヴァンデモンが帰ってくる前に紋章を！」

私たちはヴァンデモンの部屋に入ったわ。

そして部屋中心には、棺が一つだけが在ったわ。

確か紋章って・・・。

「ウィザーモン、多分紋章はこの棺の中よ。」

私がそう言うと、ウィザーモンは棺を開けて棺の中を探ったわ。

「在った！！」

ウィザーモンはそう言うと、紋章を私とテイルモンに見せてきた。

「早く此処から出よう！」

テイルモンがそう言うと私とウィザーモンは頷き、地上に出たわ。

「お前等、どこに行くんだよ！」

声が聞こえたから声のした方を見たわ。

「ヴァンデモン様の命令により、お前等をここで消させてもらうぜ！」

「インダラモン！」

「厄介な奴だ！」

テイルモンとウィザーモンは、インダラモンを睨みながら言った。

「（インダラモン。まさかのイレギュラーね。）」

「テイルモンにウィザーモンか。ま、いつかは裏切ると思っていたんだがな！」

インダラモンはそう言うと突っ込んできたわ。

「ルナモン！」

私はデジヴァイスからルナモンを出したわ。

「ルナモン、進化よ！」

私がそう言うと、ルナモンとデジヴァイスが光り出した。

「ルナモン進化ァァァ！！レキスモン！！」

ルナモンはレキスモンに進化して空高く跳躍し、急降下したわ。

「『ムーンナイトキック！！』」

レキスモンの必殺技の？ムーンナイトキック〟はインダラモンに直撃したわ。

だけど・・・。

「まさかそれが本気だったのか？期・待・は・ず・れ・だったぜ！」

インダラモンは片手でレキスモンの足を掴んでいたわ。

「直撃したはずでは！？」

「そんな攻撃で俺を倒そうとしてんのか？馬鹿馬鹿しいな！」

インダラモンはそう言うと腕にはめている宝貝（パオペイ）をレキスモンにアッパーしてこちら側に飛ばしてきたわ。

「紫苑！前！」

テイルモンの言葉と同時に避けた。

だけど足がすくわれたわ。

私の足がレキスモンと絡まってしまった。

私とレキスモンはそのまま海に落ちてしまったわ。

ｓｉｄｅテイルモン

「紫苑！！」

やばい。紫苑とレキスモンが海に落ちて約3分くらいたったぞ！

「ウィザーモン！早く紫苑を助けないと！」

「分かっている！！」

「諦めろよ。もう死んでるだろうから！」

私がウィザーモンと話していると、インダラモンが私達にそう言ってきた。

「私はあいつらを信じるぞ！あいつらがその程度で死ぬような奴じゃない！」

「私も紫苑達を信じる！紫苑達はここで終わるような人ではない！」

「どんなに信じたってあいつらの運命はここで終わりなんだよ！」

インダラモンは高笑いをして言ってきた。

インダラモンに勝つことが出来ないのはわかっている。

しかし、あいつらの運命はここで終わりじゃないはずだ！

「あいつらを信じたぶん、あいつらは私たちの期待に応えてくれるはずだ！！」

「信じても無駄だろうよ。諦めな！」

「諦めなくても良いわよ！」

後ろから女の声が聞こえた。

この声・・。

「私は自分の運命から逃げないって約束したからね。」

話している奴の姿が見えてくる。

「約束したから、ここでやられる訳にはいかないのよ。」

話してしていた人物は陸にあがり、インダラモンを見た。

その人物は、私たちのことをすべて知っていて、私たちが信じていた人物。

「「紫苑！」」

そう、【桜木　紫苑】だった・・。

第１６話　『ｐａｒｔ１６☆』（後書き）

一方、八神家。

太一「紫苑達、大丈夫だと良いんだが。」

ヒカリ「無事に帰ってきてね、テイルモン、ウィザーモン、紫苑お姉ちゃん。」

太一「今は信じてようぜ。」

ヒカリ「うん。」

第17話　『part17☆』（前書き）

最後がぁぁぁ！？

意外な展開になっちゃいました・・。

part17☆スタート！！

第17話　『part17☆』

side紫苑

「（意識が・・・。レ、レキスモンは？）」

レキスモンの方を見ると、気を失っていて目を瞑っていた。

私とレキスモンは未だ海に沈んでいっているわ。

レキスモンは気を失っていて動けない。

「（もう・・・終わりかしらね。）」

私は静かに目を瞑ったわ。

けど、その瞬間（とき）頭の中に太一さんとヒカリちゃんがバックで映ったわ。

『あぁ。絶対に帰ってこいよ！紫苑！』

太一さん。

『紫苑お姉ちゃん、待ってるよ！』

ヒカリちゃん。

「（私は太一さんとヒカリちゃんに約束をしたわ。自分の運命を変えるって。だからあの2人と交わした約束を裏切りたくないわ。私がここで死ぬという運命は間違ってると思うわ！まだよ。まだ運命を変えるチャンスはあるわ。それが今よ！）」

私がそう思った瞬間、運命の紋章が光だし、デジヴァイスは私の名前の通り、紫苑色になったわ。

「（私の運命が変わる瞬間（とき）、変える瞬間（とき）、貴方（レキスモン）も一緒よ！）レキスモン！」

私がレキスモンの名前を叫ぶと、レキスモンは光に包まれたわ。

「レキスモン超進化ァァァ！！クレシェモン！！」

レキスモンが進化して完全体のクレシェモンに進化したわ。

完全体の威圧感が伝わってくる。

このデジヴァイスの紫苑色は私にも、クレシェモンにも合っている気がするわ。

「クレシェモン。」

私が小さく呟くとクレシェモンは微笑んだわ。

「行こう。紫苑。」

私はクレシェモンにそう言われたので、少しの意識を保って頷いたわ。

クレシェモンは私をおぶって、海面に向かって跳んだ。
海面に出るとウィザーモン達が、インダラモンと何かを話していたわ。
「あいつらを信じたぶん、あいつらは私たちの期待に応えてくれるはずだ！！」
そうよ。誰かを信じたぶん、人はその人の期待に応えられるのよね。
「信じても無駄だろうよ。諦めな！」
インダラモンがそう言うとテイルモンは諦めかかった顔をしたわ。
絶対に諦めさせないわ！
「諦めなくても良いわよ！」
私はクレシェモンから離れてインダラモンにテイルモンとウィザーモンに叫んだわ。
「自分の運命から逃げないって約束したから、ここでやられる訳にはいかないのよ。」
第2ラウンドの開始ね。
「お前は俺が、レキスモンと一緒に海に落としたはず。」
インダラモンはとてつもない殺気を放ちながら言ってきたわ。

「私には約束した人たちが居るのよ。自分の運命を変える約束をね。だから私はここに来たのよ。」

私がインダラモンに言うとインダラモンは高笑いをした。

「貴様が何を言う。今パートナーデジモンも居ない1人のお前に勝ち目なんてないんだよ！」

何を言っているのよ。

何で私が一人なのよ。

デジモン三体きちんと居るのにね。

私はそう思いながら、インダラモンに、ほくそ笑んだわ。

「何が可笑しい！」

可笑しいじゃない。

だってさ、

「私たちは一人と三体きちんとここに居るのよ。」

「何を言うかと思えば、そんなことを。馬鹿馬鹿しいな。」

インダラモン。油断したわね。

「『アイスアーチェリー！！』

インダラモンが油断している時に空から氷の矢が無数、降ってきてインダラモンに直撃したわ。

「貴様は誰だ！」

テイルモンはインダラモンに攻撃した相手を見て叫んだわ。

「私忘れられてるの？まぁ無理もないよね。私はレキスモンから進化したデジモン、クレシェモンだよ！」

レキスモンから進化したデジモン、クレシェモンがテイルモンに叫んだ。

「完全体に進化したのか！？」

ウィザーモンがクレシェモンの言葉を聞いて、驚いていたわ。

流石、理解力があるわね。

「その通りよ。あとはクレシェモンに任せましょう。」

私がそう言うと、テイルモンとウィザーモンは驚いたわ。

「紫苑、クレシェモンが完全体だからって、インダラモンはそこらの完全体とはわけが違うんだ！」

確かにウィザーモンの言うとおり。

でも今のクレシェモンはちょっとレベルが違うわ。

「クレシェモンは絶対に勝つわよ。クレシェモンを信じて。」
私がテイルモンとウィザーモンに言うと、2体はうなずいてくれたわ。
「ありがとう。クレシェモン、貴方の本気を見せ付けなさい！」
「ただの完全体1体が俺と殺り合う？俺も嘗められたものだな。」
インダラモンはそう言って両腕にはめている宝貝（パオペイ）を棍棒のように振り回し突進してきたわ。
だけど・・、
「私だって、何度も同じ技を喰らうようなデジモンじゃないよ！！」
レキスモンはインダラモンのアッパーを簡単に避け、攻撃態勢に入ったわ。
「『ルナティックダンス！！』」
クレシェモンは舞うようなステップで、両手に持っている武器を使って、インダラモンを斬撃していってるわ。
「グフッ！ガハッ！」（ｒｙ）
インダラモンはクレシェモンの技を喰らうたびに悲鳴を上げているわ。

「インダラモンは他の完全体とは違うレベルなのに、如何してあんなに、しかも簡単に攻撃できるのだ！」

流石のウィザーモンでもわからないのね。

「答えは簡単よ。・・・今が夜だからね。」

「それはどう言う意味だ？」

やっぱりテイルモンもわからないのね。

「クレシェモンは月の光を受けると、強さが倍増するのよ。つまり簡単に言うと、夜になればクレシェモンが有利になるってことよ。」

私が簡単に説明をすると二体は理解してくれたわ。

クレシェモンに視線を移すと、決着が着きそうだったわ。

クレシェモンはインダラモンに隙を与えずに舞いようなステップで攻撃を繰り返しているわ。

その為、インダラモンのデータはもろくなっているわ。

しかし、インダラモンは無言で、倒れることはなかったわ。

「インダラモン。限界を超えているんでしょ？だったら、もう楽になったほうが良いよ。」

クレシェモンは攻撃を一時的にやめた。

「―ね」

「？」

「死ね・死ね・死ね！」（ｒｙ）

インダラモンの目からは光が消えていて、濁った目になっていたわ。

「インダラモンはすでに死んでいる。」

テイルモンは小さな声で言ってきたわ。

止めを刺してあげないと。

「クレシェモン、止めを・・・。」

私がクレシェモンに言うと、インダラモンは『死ね』と言う単語を何度も叫びながら、アッパーを繰り返してきたわ。

データがもろくなっているのに、攻撃するなんてね。

「死ね死ね死ね死ね死ね！」（ｒｙ）

死神のような殺気を放ってもレキスモンは怖気づくことはなく、クレシェモンは必殺技を放ったわ。

「『ダークアーチェリー！！』」

レキスモンの必殺技はインダラモンに当たり、跡形もなく消え去ったわ。

「さぁ、早く帰りましょう！！」

私は見つかる前に帰ろうとしたわ。

しかし……

「『ブラッティーストリーム！！』」

突然の声と同時に、血で染まったような紐で私とクレシェモン・ウィザーモンは括り付けられ海に投げ飛ばされた。

最後に私が海面で見たのは、テイルモンが叫びながら涙を流して、ヴァンデモンが高笑いしている様子だけだったわ。

それで私は気を失ったわ。

side太一

紫苑たちがヴァンデモンのアジトに向かって、かなり時間が掛かった。

余りにも帰ってくるのが遅過ぎる。

「……お兄ちゃん、紫苑お姉ちゃん達、無事に帰って来るよね？」

ヒカリが、泣きそうな声で俺に聞いてきた。

「大丈夫さ！紫苑は約束してくれたんだぜ！」

俺はヒカリに無理矢理笑ってそう言った。

「うん。紫苑お姉ちゃん達は、ちゃんと帰ってくる・・・。」

「取り敢えず、今日は寝よう！明日になれば、紫苑だって居るはずだ。」

「うん。」

俺は部屋の電気を消して、目を瞑った。

第17話　『part17☆』（後書き）

疲・れ・た〜〜〜〜！

頑張ったと思う人！

は〜い！！↑自問自答

第１８話　『ｐａｒｔ１８☆』（前書き）

ヴァンデモンｐａｒｔ後半にやって参りました！！

ｐａｒｔ１８☆スタート！！

第18話　『part18☆』

side太一

「眩しい・・・。あ、朝!?紫苑は!?」

俺はリビングに急いで向かった。

時刻は既に7時を過ぎている。

いつもならこの時間に来ていて、母さんの手伝いをしているはずなのに、今日はいなかった。

「・・・太一、おはよう。」

母さんが俺に気付き、元気のない声で挨拶をしてきた。

「母さん、紫苑は!?」

「さっき、紫苑ちゃんの家にお邪魔したら、テーブルに置き手紙があったのよ。」

そう言って母さんは置き手紙を渡してきた。

『今日は親戚の家に行くことになったので暫く家を空けます。もしこの手紙を見ているなら皆さんに伝えて下さい。宜しくお願いします。紫苑より』

「（前から考えていたんだとしたら、やはり昨日、ヴァンデモンのアジトで何かあったんだ！）」

俺は直ぐに自分の部屋に戻り、パジャマを脱いで服に着替えた。

「どうしたの、太一ぃ。」

寝ていたアグモンが起きて、眠たそうな声で聞いてきた。

「紫苑が昨日から帰ってないんだ！！だから俺、ちょっと探しに行ってくる！！」

俺がアグモンに紫苑の事を教えると、アグモンは驚いた顔をした。

俺は部屋から出ようとした。

「待ってよ、太一！」

アグモンはベッドから出て、俺の背中に隠れて部屋を出ようとした。

「待って、お兄ちゃん！」

するとヒカリが起きて、俺の手を掴み止めた。

ヒカリは、不安そうな顔で俺の顔を見てきた。

「お兄ちゃん、私も行く！！」

「ダメだ！ヒカリは家に居ろ！」

俺は危険だと思い、ヒカリに家に居るようにと言った。

テイルモンが居ない中、ヒカリをヴァンデモンから守りきれると思えない。

それでもヒカリの目は、それでもいい、と言わんばかりに真剣な目で俺を見た。

「紫苑お姉ちゃん、私のために戦ってるんでしょ？私だけ安全にしているより、一緒に行った方がマシだよ！」

「わかった。早く服に着替えろ！」

「うん！！」

ヒカリの決意は、誰がなんと言おうと絶対に変わらない。もちろん、俺も。

ヒカリは急いで服に着替えていた。

「着替えたな？行くぞ！」

「キャァァァァァ！？」

俺たちが部屋から出ようとした時、リビングから母さんの悲鳴が聞こえた。

俺は玄関に視線を移すと母さんがバケモンに連れて行かれていた。

「太一ー！？ヒカリー！？」

「母さーん（お母さーん）！！」

俺とヒカリが母さんのを助ける為に母さんに近づいたら、バケモンが襲ってきた。

「太一、ヒカリ、危ない！！」

アグモンが俺とヒカリの前に立つと、俺のデジヴァイスが光り出した。

「アグモン進化ァァァ！！グレイモン！！」

アグモンはグレイモンに進化し、俺とヒカリを背中に乗せてバケモンを倒した。

外に出ると、沢山の人達がバケモンに連れて行かれていた。

「太一ー！！ヒカリー！！」

声のした方を向くと、少し離れた場所に母さんの姿が見えた。

「グレイモン、母さんを！！」

「そうはいくか！『ソウルチョッパー！！』」

母さんを助けに行こうとすると鎖鎌を持ったデジモンに邪魔された。

グレイモンは、鎖鎌を持ったデジモンの攻撃を喰らって地面に倒れた。

「グレイモン、大丈夫か！？」

「バケモン、奴等を捕まえろ！！」

鎖鎌を持ったデジモンがバケモンに命令すると、バケモン達が俺達の方へやってきた。

「太一、すまないが、後で必ずお母さんを助けるから、今は逃げよう！！」

グレイモンは立ち上がって俺とヒカリにそう言って母さん達と逆の方向へ歩きだした。

「母さーん（お母さーん）！！」

「太一ー！！ヒカリー！！」

俺達はデジモン達が居ない安全な場所に逃げた。

ｓｉｄｅタケル

僕はテレビを観て、お台場が大変な事になってるのを知った。

「大変だ！」

僕は鞄に荷物とパタモンを詰めて、鞄を背負って玄関へ行って靴を履いた。

「タケル、何処に行くの！？」

ママが僕の後ろに来て、何処に行くのかを聞いてきた。

何処に行くかは決まってる。

「パパとお兄ちゃんを助けに行く！」

「ダメ！危険よ！」

僕が助けに行く事を言うと、ママは僕がお台場に行く事を反対してきた。

ママの言うとおり危険かもしれない。

それでもあそこには！

「あそこには、パパとお兄ちゃんが居るんだよ！！僕も行かないと！」

皆が危ないのに、僕だけが安全でいられるのは嫌だ！

「タケル。・・・そうね、行きましょう！」

「うん！」

ママが賛成してくれたので僕は大きい声で返事をした。

そして僕達は、皆を助けに、お台場に向かう為に家から出て行った。

ｓｉｄｅヤマト

「なんでこんな女の子が…！？」

俺とガブモンは浜辺を歩いていたら、タケルより１５ｃｍほど高い女の子が浜辺に倒れていた。

「や、ヤマト！！この子、デジヴァイスを持ってるよ！！」

「なんだって！？」

俺はこの子のスカートについている物を見ると、デジヴァイスがあった。

「デジヴァイスだと！？」

「ヤマト、この子が八人目か九人目で、ヴァンデモンにやられたのかもしれないよ！？」

ガブモンの発言は、可能性が十分に在る。

「ガブモン！取り敢えず、この子を安静にさせるぞ！」

「分かった！ガブモン進化ァァァ！！ガルルモン！！」

俺はガブモンをガルルモンに進化させ、ガルルモンの背中に女の子を乗せ、近くの安全なビルに向かって走り出した。

第１８話　『ｐａｒｔ１８☆』（後書き）

次回は微妙ですが、頑張ります！

次回もお楽しみにっ！！

第１９話　『ｐａｒｔ１９☆』（前書き）

今回は久しぶりの銃ケース登場！！

使いませんが・・・。

第19話　『part19☆』

side紫苑

此処は一体何処？

私は自分が寝ていた隣を見ると、銃ケースが置かれていた。

それにしても、ここって何処かのビルの裏かしら？

私は体を起こすと、急に小さな物体がお腹に直撃したわ。

「紫苑！大丈夫！？痛い所とかない！？」

ルナモンか。

相当心配してくれていたのね。

「えぇ今の所は大丈夫よ。」

「ゴメンね、紫苑。私が油断していたから・・・。」

私が大丈夫と言うと、ルナモンが涙目になって言ってきたわ。

ルナモン・・。

「別にルナモンの所為じゃないわよ。私だってもっと早くに気づい

ていれば・・。」

私がルナモンの頭を撫でていると、奥から誰かが来たわ。

「結構心配したんだぜ。」

誰かとは、金髪で性格がクールな、私より年上の少年。ヤマトさんだったわ。

でも何故ヤマトさんが？

「自己紹介が未だな。俺は石田　ヤマト。お台場小学校の5年でそっちに居るのは俺のパートナーのガブモン。宜しくな。」

私も自己紹介をしないといけないわね。

「私は桜木　紫苑。港区立港陽小学校（みなとくりつこうようしょうがっこう）2年よ。宜しくお願いします。」

私はヤマトさんと握手をした。

「ルナモンから話は聞いたぜ。もちろん、ヴァンデモンのこともな。」

そっか。

そういえばウィザーモンが居ないわ。

もし原作通りならウィザーモンは丈さん達に助けられえ居るはず。

なら大丈夫だと思うけど・・。

「ヤマトさん。助けてくれてありがとうございます。早速ですが、ビックサイトに向かうわよ。」

「どうしてだ？」

やっぱり理由は知らないのね。

「ビックサイトに、ヴァンデモンと、お台場の人々が集めらているの。」

私が理由を説明するとヤマトさんは納得してくれたわ。

「じゃあ俺も行くよ。お前のことも心配だし、ヴァンデモンのことだからな。」

「ありがとうございます。それじゃあ早く行くわよ。」

私はそう言って銃ケースを背負い、ヤマトさんはデジヴァイスを取り出したわ。

「ガブモン進化ァァァ！！ガルルモン！！」

ガブモンはガルルモンに進化をしたわ。

私たちはガルルモンの背中に乗って、ビックサイトを目指した。

ｓｉｄｅ空

私はサッカーの朝練のため、朝早くから学校に行ったわ。

「朝練に遅刻しちゃうわね・・・。！？」

学校に行く為にもう一つの道を行こうと思ったらバケモンが沢山の人々を連れていたわ。

私は身を隠して、バケモン達の様子を伺っていた。

「（どうしてデジモンが居るのよ！？）」

私は一度家に帰ってピヨモンに話そうとしたけど・・・

「逃がさんぞ！」

近くに居たバケモンに気づかれたので、私はそのまま捕まったわ。

ｓｉｄｅ丈

「はぁ・・・。」

「溜め息なんかしてどうしたのさ。」

僕が溜め息をすると、僕の相棒（パートナー）が呆れて聞いてきた。

「だってさ、お台場は謎の霧で覆われていて、船が出ない。これじゃあ、帰る事も出来ないよ。」

どうやってお台場に行くか・・・。

船が出てこないから海を渡ることも出来ない。

・・・あ！？

「丈、オイラがいるぜ！」

お台場に行くにはイッカクモンに乗っていくしかないな！

ｓｉｄｅミミ

もぉ、一体何なのよぉ！

「何で朝からバケモンが、こんなにも居るのよぉ！！」

私はバケモンから逃げて、エレベーターの中にいる。

するとママが、私を見てきたの。

「ミミちゃん、バケモンってあの幽霊の事？」

バレちゃダメなのよね！

「違うの！アハハハ。」

危なかったわ。

今は私とパパとママ、そしてパルモンを布に隠して、一階に行くことだけを願っていたわ。

すると途中でエレベーターが止まったわ。

もしかして他にも助かった人が？

「僕達の他にも、助かった人が居るんだ！」

パパがそう言うと、エレベーターの扉が開いた。

扉が開くとバケモン達が入ってきて、私達を捕まえてきたわ！

「いやぁぁぁぁぁぁ！？」

私達はバケモンに捕まった・・・。

ｓｉｄｅ光子朗

「光子朗はん！！はよ逃げな、ワテ等も捕まってしまいます！」
テントモンが、僕の後ろで焦りながら僕に言ってきました。
僕はゲンナイさんに貰ったプログラムを完成させようとしていました。そうすればこの状況を突破できるからです。
「光子朗、速く逃げましょう！！」
お母さんとお父さんが僕の部屋に入ってきて、僕に言ってきました。
でも、今は気にしてる時間はありません！！
「お母さん、お父さん。もう少しだけ待ってください！」
「光子郎！！」
「やらせてあげよう。」
お母さんが僕に大きな声で怒ると、お父さんが許してくれました。
ありがとうございます、お父さん。
「信じよう、光子朗を。」
「……そうね。」
お父さんに説得され、お母さんも僕を信じてくれました

「頑張ります！」

「光子朗はん、バケモンが来たで！！」

するとテントモンが急に部屋に入ってきて、教えてくれました。

「何だ、このテントウムシは！？」

お父さんが、テントモンを見て驚いた声で僕に聞いてきました。

「ワテの名前はテントモン。あんさんらの味方さかい、安心してくださいな。」

「関西弁……」

テントモンが二人に自己紹介をすると、お父さんが目を点にして呟きました。

「……それより光子朗はん、バケモンが！！」

テントモンは、僕にバケモン達が来た事を教えてくれました。

（ドカッ！！）

すると、　この家の扉が破壊される音が聞こえました。

「もうおしまいや！！」

やっとプログラムを完成させる事が出来ました！

僕は急いで、デジタルバリアを始動させました！

するとバケモンは僕の部屋を何度か見て、外に行きました。

「お父さん、お母さん、この部屋に居れば安心です。だから絶対にこの部屋から出ないで下さい！」

僕はそう言って、テントモンと一緒に外へ行こうとしました。

「待って、光子郎！」

するとお母さんが、僕を止めてきました。

「お母さん……」

「無事に帰ってきてね、光子郎。」

僕は振り返って、笑顔で挨拶をしました。

「……行ってきます！！」

第１９話　『ｐａｒｔ１９☆』（後書き）

今回の銃ケース、全然でしたね・・・。

あぁ疲れたぁ。

次回もお楽しみに！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1866x/

デジモンアドベンチャー　転生者になった…

2011年11月15日23時19分発行